

初期有部阿毘達磨論の状況(下)

榊田善夫

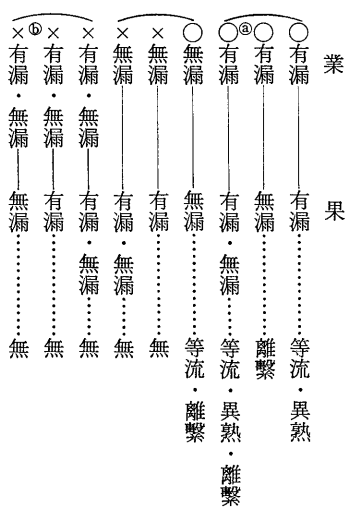
前稿(上)では、これまでの研究報告を通じて、西北インドを中心とした初期有部阿毘達磨論の状況として、カシュミール国毘婆沙師、ガンダーラ国毘婆沙師、さらに西方師という三つの学派の存在が想定できた。この三つのグループの存在を裏づける実事は、発智論・大毘婆沙論の十五心見道説、八捷度論・外国師の十六心見道説、集異門足論・西方諸師の十七心見道説に如実に見られるが、さらにこれ等三学派の存在は、阿毘達磨論の各重要項目の解釈に密接な影響力を持っていたと思われる。だがいまだその存在の重要性については十分に認められていない、それ等三学派の關係について、又その具体的な思想内容についても未知となっているのが現状である。本稿では、前稿に引き続いて、三つのグループの存在を表現する様な実例を取り上げて検討することとする。

大毘婆沙論の項目で示せば、「第四編 業蘊」「第四章 表業無表業に関する論究」「第五節 有漏・無漏業と有漏・無漏法との因果關係」に見られる各論書の相違点とその代表的な実例の一つとして取り上げることができる。発智論と大毘婆沙論本論とは、ここで八捷度論と大きな教理的相違を見せるのである。

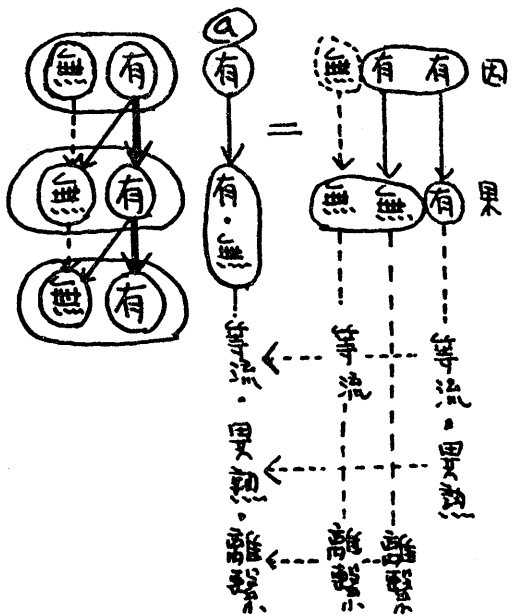
発智論(大正二六・九九b) 大毘婆沙論(大正二七・六四〇b~c)

- 「頗業有漏、有漏果耶。答有。謂等流異熟果。」
- 「頗業有漏、無漏果耶。答有。謂離繫果。」
- 「頗業有漏、有漏無漏果耶。答有。謂等流異熟離繫果。」
- 「頗業無漏、無漏果耶。答有。謂等流離繫果。」
- 「頗業無漏、有漏果耶。答無。」
- 「頗業無漏、有漏無漏果耶。答無。」
- 「頗業有漏無漏、有漏果耶。答無。」
- 「頗業有漏無漏、無漏果耶。答無。」

この文章の内容だけを略図化すると次の様になる。



この発智論・大毘婆沙論では、①の様に原因である業が有漏の時、有漏と無漏の結果に等流果・異熟果・離繫果は認めるが、②の原因なる業の有漏と無漏である時には、その結果としての無漏果は認めていない。これをさらに図式化すれば図①の様になる。



これに対して大毘婆沙論中に引用する西方諸師は、次の様に説いている。大毘婆沙論中の西方諸師説(大正二七・六四〇b~c)

- 「頗有ニ業有漏無漏果ニ耶。答有。謂等流異熟果。」
- 「頗有ニ業有漏無漏果ニ耶。答有。謂離繫果。」

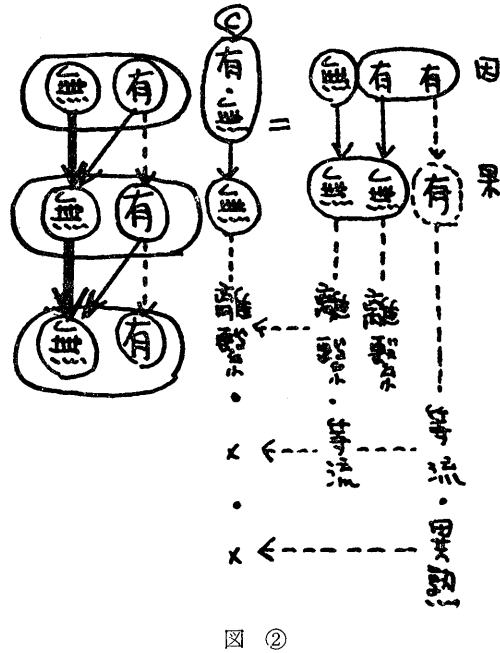


図 ②

- 有漏……………等流・離繫
- 有漏……………離繫
- ×有漏……………無
- 無漏……………等流・離繫
- 無漏……………無
- ×無漏……………有漏・無漏……無
- ×有漏……………有漏・無漏……無
- ×有漏……………有漏……………無
- 有漏……………無漏……………離繫

頗有業有漏有漏無漏果一耶。答無。
 頗有業無漏無漏果一耶。答有。謂等流離繫果。
 頗有業無漏有漏果一耶。答無。
 頗有業無漏有漏無漏果一耶。答無。
 頗有業有漏無漏有漏果一耶。答無。
 頗有業有漏無漏無漏果一耶。答有。謂離繫果。」
 これを略図化すると次の様になる。

- 有漏……………有漏……………等流・異熟
- 有漏……………無漏……………離繫
- 有漏……………有漏……………等流・異熟・離繫
- 無漏……………無漏……………等流・離繫
- ×無漏……………有漏……………無
- ×有漏……………有漏……………無漏……………無
- ×有漏……………無漏……………無
- 有漏……………無漏……………離繫

この西方諸師の説は、㉔で原因の業が有漏の時、結果としての有漏・無漏果は認めないが、㉕では業の有漏・無漏の時、結果の離繫果を無漏果として認めている。この説は、先の発智論・大毘婆沙論本論に対してまったく逆の立場を取っていたと言いうことができる。さらに略図化すれば図②の様になる。(図②の㉔を㉕に訂正)

続いて八健度論は、これ等二説に対してまったく違った説を取っている。
 八健度論(大正二六・八五一b)
 「頗有漏行有漏果耶。答日有。謂所依果報果。
 頗有漏行無漏果耶。答日有。解脱果。
 頗有漏行有漏無漏果耶。答日有。謂所依果報果解脱果。
 頗無漏行有漏果耶。答日無。
 頗無漏行有漏無漏果耶。答日無。
 頗有漏無漏行有漏果耶。答日無。
 頗有漏無漏行無漏果耶。答日有。解脱果。」
 これを略図化すれば次の様になる。

これ等の文章から八健度論は、㉔で発智論・大毘婆沙論本論が有漏業・無漏業から無漏果を許していないのに対して、㉕の個所でそれを認め、又西方諸師が㉔で有漏業から有漏果・無漏果を許していないのに対して、㉕でそれを認めると様な非常に寛容な態度を取っていることが知られるのである。さらに略図化すれば図③の様になる。

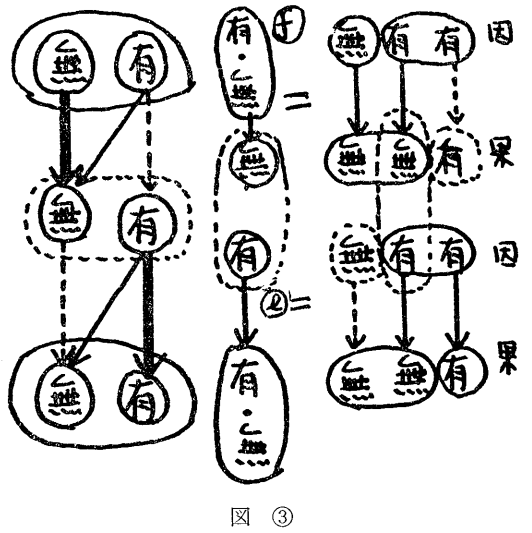


図 ③

この発智論・大毘婆沙論本論と西方諸師の説が異なる理由として、次の様な説明を大毘婆沙論では述べている。まず西方諸師説から以下取り上げる。(傍線は筆者)

「西方諸師作^①如是説。此中依^②多因一果^③而作論。……所以者何。此中依^④多因一果^⑤而作論。故無^⑥如是果体是有漏亦無漏。如^⑦無此果^⑧亦無^⑨此因。」(大正二七・六四〇c)

この西方諸師は、多因一果説に依る故に④の有漏・無漏業から無漏果は認めるが、⑤の有漏業から有漏・無漏果は認めないとする。原因の複数であることは認めるが、結果は単数しか認めていない。この学派の取る立場の特徴が明確に表現されている。これに対して、発智論・大毘婆沙論本論の立場は、次の様に説明している。

「迦濕弥羅國諸論師言、此中依^①因多果^②作^③論。……所以者何。此中依^④因多果^⑤而作^⑥論。故無^⑦如是因体是有漏是无漏。如^⑧無^⑨此因^⑩、亦無^⑪此果^⑫。」(大正二七・六四〇b-c)

先の西方諸師説とは反対に、ここでは一因多果説に依るが故に④の有漏業から有漏果は認めるが、⑤の有漏・無漏業から無漏果は認めないとする。因を重要視する所からこの学派はこの様な一因多果説という立場を取らざるを得なかったと言いうことが出来る。これ等兩学派に対して、八健度論は自己の立場を説明していないが、多因一果説、一因多果説の両者を認めていたことはすでに見てきた所であった。

このことをさらに思想的に分析してみると、カシュミール国諸論師が一因多果説の立場を取り、有漏業の有漏・無漏果への展開のみを許すことは、仏教自身がいつも問題にしている凡夫が仏陀になると言う有漏→無漏への展開に対して、無漏→無漏への展開、つまり悟りや修行道に対する関心よりも、有漏→有漏への世俗での展開

により大きな関心が払われているのではと考えられるのである。勿論、この有漏→無漏への展開を問題とするが、その中で有漏→有漏に關心を払う裏には、無漏→無漏への展開に対して考慮されているものと思われる。

これに対して西方諸師が多因一果説を方法論として取り、有漏・無漏業の無漏果への展開のみを許すことは、凡夫が仏陀になる有漏→無漏への展開の中で、無漏→無漏に對し大きな関心が寄せられていたと言える。だが、現実はいくまでも有漏→有漏への連続であるから、その中で無漏を問題とすることは、悟りの究明であると共に、悟りの体系付けを目標としていた為にこの様な方法論を取ったものと言える。

さらに言えば、カシュミール国諸論師が因を重要視することは、有漏→無漏に展開しうる有漏とは何であるのかとする現実の究明であると共に、悟りが現実に対して如何なる作用を及ぼし、有漏である主体が如何なる可能性のもとに現実と関わっているのかと言う問題解明の為にこの様な因果関係を取ったと言い換えることができる。

さらに別な言葉で表現すると、西方諸師が多因一果説を方法論として取ることは、仏陀入滅以来問題となっていた「悟り」と言う、一つの実践的要求、乃至関心を解明する為に、必要可能な知識と方法の探索・検討による問題追求であるのに対して、カシュミール国諸論師が一因多果説を方法論として取ることは、確認されている経験の諸法則・研究方法から、多くの悟りへの可能性、未知の領域への方法論の適用とも言い換えることができるものである。

これに対して八健度論が、カシュミール国諸論師の一因多果説、西方諸師の多因一果説の両者を認めることは、因果の関係に對して混乱を生じさせる態度であると言えるし、縁起に對して否定的態度であるとも言える。又因と果のどちらにも等しく関心を払うことは、時間的に現在判的であり、さらに人間の主体性について多くの関心が払われている為とも推定できる。むしろ因果の関係と言う理論的関心よりも宗教的なものにより多くの考慮が払われている為だとも考えられる。この様な立場から悟りの体系化を目差す所に八健度論の特性のあること、又カシュミール国毘婆沙師との間で摩擦の生じる結果になっていったことはすでに「新旧西毘婆沙論に於ける一・二の相違点について」(印度学仏教学研究第三十卷第二号)で見たと所であった。

以上、前稿での西北インドを中心とした初期有部阿毘達磨論の三つの学派の想定に引き続いて、三学派の存在が実際に確認できる事例を取り上げ、相違点を分析してみた。この相違は先の実例に留まらずにさらに多くの実例から引き出せるものと思われるが、この三学派の具体的な関係とは如何なるものであったのか。又これ等の学派はさらに細分化できるものと思われるが、この三学派の初期阿毘達磨教成立に果たした役割は如何なるものであったのかといった問題は課題として残されたままである。